日義村の文化財 4

上の原遺跡

――平安時代小鍛冶住居址――

中部電力資材置場造成に伴う発掘調査

1979・3

中部電力株式会社長野支店
長野県木曽郡日義村教育委員会

目　　次

はじめに …… 1
1. 遺　　跡 …… 2
2. 発堀調査 …… 3
3. 遺　　構 …… 4
4. 遺　　物 …… 7
5. まとめ …… 12

挿図目図

第1図　遺跡附近地形図 …… 13
第2図　調査地附近地形図 …… 14
第3図　H2号住居址実測図 …… 15
第4図　地層図と土坑実測図 …… 16
第5図　出土土器と鉄器実測図 …… 17
第6図　出土石製品実測図 …… 18

図版目次

第1図版　遺　　跡 …… 19
第2図版　H2号住居址 …… 20
第3図版　土坑と溝 …… 21
第4図版　鉄器と石製品 …… 22
第5図版　石製品と炭化種子 …… 23
第6図版　調査スナップ …… 24

日本考古学研究所

はじめに

中部電力株式会社では、かねてより木曽地方における電柱資材置場の用地を物色中のところ、日義村にその候補地を定め、国道19号線から尻平沢川の北側段丘に約 1,400 ㎡の用地を買収された。

このことを知って、日義村教育委員会では、この部分が上の原遺跡にあたり、縄文時代、平安時代の遺跡として村内では注目される所であることを中電側に連絡した。そして調査の必要性と協力を要請し協議の結果、昭和53年度に中部電力株式会社長野支店からの委託を受けて、日義村教育委員会が学術発掘調査することになった。

調査団長に神村透氏、調査員に田中博、樋本修一、長谷川悦夫、芦部公一、千村喜万男の各氏を依頼し、木曽西高校地歴部、上松中学校考古学クラブの諸君の協力を得て、夏休みに発掘調査を行った。

ことのほか暑い夏であったし、当初の予想に反して水田部分に住居址が検出されたり、深いV字溝の落ち込みがあったりして、かなり大変なご苦労をおかけした調査であった。

調査の結果は、住居址１、溝２、土坑５と少量の遺物であった。遺構と遺物では、小鍛冶遺構と石製品が注目されるところであろう。過去の調査と関連して、この遺跡の扇状地部の遺構分布状況がおおよそ推察できるようになったのは、成果の一つであろうと思われる。しかしその反面、分布状況が分っていくに従い、将来に予想される各種の開発行為が心配されてならない。永く埋蔵され続けることを願わずにはいられないが、現状変更の場合は最少限度に留めることを、みんなで考えていくことが今後の課題であろう。

この小さな調査にも60人、延 240 余人のご協力をいただいた。関係各位に深く感謝申し上げます。

更にこの報告書作成にあたっては、神村透先生が多忙な職務にもかかわらず、執筆の任にあたられたことをつけ加えて、深く感謝申し上げる次第です。

昭和54年２月

日義村教育長　今井秀夫

1. 遺　　跡

上の原遺跡は、長野県木曽郡日義村宮の越上の原に所在する（第１図)。

日義村は木曽川の最上流部に位置し、木曽駒ヶ岳の西山麓の、巾600～800ｍの南北に走る断層谷を木曽川が流れている。木曽川の両岸には小規模な河成段丘が見られ、そこに村落が見られる。宮の越附近では東岸に段丘が発達しており、木曽山脈からの支流によって切られ、いわゆる田切地形をつくっている(第１図版１)。その一つ一つが遺跡となっている。宮の越部落の南のはずれには尻平沢とよばれる比較的大きな沢があって、段丘上と段丘下に小規模な扇状地をつくっている。この沢をはさんで南側が「お玉の森遺跡」（第１図２)、北側が「上の原遺跡」(同図１）で、日義村を代表する遺跡である。附近には、「経塚遺跡」(同図４)、駅東遺跡（同図３)、巾遺跡（同図４)、芝垣外遺跡（同図５)、百島遺跡（同図６）などがある。

上の原遺跡は南北 600 ｍ、東西は南で 300 ｍ、北で 100 ｍのほぼ台形上の台地である。遺物散布はその南半、尻平沢に沿って多くあって、山よりに縄文時代の遺物が多い。この台地のほとんどは畑地で、尻平沢に沿って一部水田が見られる。近年、この台地を横切って国道19号線が通り、道路に沿って食堂や自動車整備工場がつくられてきている。

遺跡の扇頂部に遺物散布が多く、古くから表面採集がされている。戦後、日義中学校教諭丸山通人氏によって発堀調査され、縄文時代前、中期の遺物と住居址を確認している(第１図２の１)。昭和30年には神村透が調査して、縄文時代中期住居址１と、平安時代住居址１を検出している（同図２の２)。

国道がこの台地を通ずるようになってからいくつかの開発や土木工事が見られ、昭和52年には尻平沢砂防工事に伴なう工事用道路が遺跡地にかかって造成されることになった。それに伴なう発堀調査を昭和52年夏に行なった（同図２の３)。今回はその道路の北側、国道の東側に接した土地が、中部電力の資材置場予定地として買収された。そのための記録保存の発堀調査を昭和53年夏に行なった（同図２の４)。

2. 発堀調査

上の原遺跡では前記のように、3度の発堀調査が行なわれており、今回が第4次調査ということになる。

国道沿いということで、中部電力の資材置場の用地として買収された（第1図版2）。この地が遺跡地であるため、日義村教育委員会では、長野県教育委員会の指導を受けて、中部電力と協議し、中部電力から委託をうけて、記録保存のための緊急発堀調査をすることになった。教育委員会では、調査団長に神村透、調査員に田中博、樋本修一、長谷川悦夫、千村喜万男に依頼して調査団を組織した。発堀調査には木曽西高校地歴部、上松中学校考古学クラブの諸君の協力を得ることにしたため、調査は夏休みに行なうことになった。

用地は国道に接した山よりの畑と水田の2枚の耕地で、水田南側の畑を道路工事で切りとった際に平安時代のカマドを確認している。そこに隣接していることから平安時代の遺構を予想した。水田は南側の山麓を大きく切り崩して、北西に深くうめているので南半分には遺構がないと考えた。北半は埋め土が深いので、下の畑に調査のねらいをおいた。

南北を基準線にして、三米四方のグリットを設定し、南からA・B・CとMまで、西から1・2・3と12までの計102を数えた（第2図）。畑にねらいをおいたので、北より調査して、畑で25グリット調査するが、少量の遺物が出土するのみで、遺構はなかった。水田も北より調査を進めるが、山よりは浅く、地山となるが、川よりは深く、V字溝の落ち込みもあったりして調査が大変であった。水田造成によって包含層や遺構はないと考えていた南端部に広い落ち込みが見られ、壁上面をけずりとられた竪穴住居址を確認し、この部分4グリットを南に広げて、水田部で50グリットを調査した。溝の部分は全体に埋め土が深く、全面調査は困難であったため、3・5・11の3ヵ所で南北に溝の巾をおってみた。

住居址の完堀と実測をし、溝の部分の地層図をつくって調査をおえる。

3. 遺　　構

今回の調査で検出された遺構は、平安時代の住居址１軒（Ｈ２号住居址）と、土坑５、溝２である。これらの遺構は少しの時間差があるが平安時代後期のものと、出土遺物から考える。

Ｈ２号住居址（第３図、第２図版）

先に神村が検出した平安時代住居址をＨ１号住居址とし、今回の住居址をＨ２号住居址とする。調査地の西南隅にあり、その西南半は水田造成時に壁を切りとられ、北側は自然傾斜地で床面までが浅かったため、畑地の頃の耕作で荒れている。そのため壁高はつかめなく、北隅の壁も不明確であったが、おおよそのプランはつかめた。

住居址は不整長方形であり、床面中央部が一段さがっていたため、復合住居址とも考えたが、完堀後検討して一軒の住居址と考えた。南壁で土拡が切っており、北壁が不明であったりして全壁を知ることはできなかったが、南北約5.5ｍ、西南約５ｍの、わずかに南北の主軸方向に長い竪穴住居址である。カマドは南壁（山よりの壁）の東隅に近い所にある。このことから南壁を奥とすると、主軸はＳ30°Ｅとなる。Ｈ１住居址でもカマドの位置は同じであった。お玉の森遺跡では、そのほとんどが西壁央央部（木曽川よりの壁）にあって、傾向が異なっている。南が山よりで傾斜が高くなっているためと考える。住居の床面はロームをほりこんでつくられ、堅く良好である。

住居の埋土（第４図①）は、壁際にロームまじりの黒褐色土がおちこんでいて、住居内は褐色土が埋めていた。住居内にある土坑５は床面下にほりこみ、それを埋めるロームまじりの褐色土は南東床面にのびていて、この土坑が廃絶時か、それ程時間をおかなく堀られたことを示している。

床面は全体に良好で、特に中央部はつきかためられていて堅かった。この中央部はほぼ2.5ｍ四方の正方形の広さに、南で５㎝、北で10㎝ほど低くなっていて、周囲の床面がいわゆるベット状遺構のようになっている。このおちこんだ中央床面の中央部に小鍛冶の火床があって、この部分が鍛冶場としての作業場であったことを示す。火床は東西33㎝、南北25㎝の西にすぼまる洋梨形で、東に深くなっている。床面を堀り凹めて、粘土をつきかためてつくってあり、それが焼けて青灰白色をしていてかたかった（第二図版３）。深さ８

cmの火床の中は木炭まじりの黒土がうまり、中から小さな鉄滓と桃の炭化種子１がでている。火床から南東に深さ３cmの断面半円状の溝が17cmあって、100×50×14cmの長方形の堀り込みに接続している。この溝の部分も焼けており、堀りこみにふいごがすえられ、溝にふいごの羽口がおかれていたと思われる。羽口の破片は床面から３片出ている。火床に接して東に長方形の割石のかなとこ石がおかれていた。また西床面にも長円形のかなとこ石半欠があった。

柱穴ははっきりしないが、西隅外、土坑２、３の中、東壁中央の外、土拡５の東にあるが、規則正しい配列とはなっていない。

焼土は南壁の中央より東より、北壁の中央と、床面中央の３ヵ所の床面にあって、南壁のそれは石があり、焼土の状態から石組カマドとした。カマド（第２図版２）は住居廃絶時にこわされ、さらに土坑１で切りとられている。その上水田造成時にもこわされて構造をつかめない。南壁に接してある焼土も床面が相当に焼けていて、火使用が長かったことを示している。この焼土に接して、壁によりかかって大きな砥石があった。

土拡（第３、４図第三図版）

土坑はＨ２号住居址をほりこんで５コ検出した。

土坑１、Ｈ２号住居址の南壁中央にあって壁と床面をほりこんでいる。直径1.8ｍのほぼ円形で西に土拡２が並ぶ。南壁存在部から40cmの深さがある。土坑中央部には角礫が集積しており、合計41コあった。(第３図版１、2版)。そのほとんどは底からういていた。底部には巾20cm前後厚さ６cmの環状に焼土が見られ、中央にも焼土があった（第三図版３）。焼土の一部が北東壁にかかり、そこには禾本科植物（カヤ？）の炭化植物が見られた（第三図版４）。埋土は黒褐色砂土で、土坑２・３と同じで、竪穴住居址の埋め土とは違っており、時期も新しい。火葬墓と考えられる。

土坑２　１に西接してあり、直径約１ｍの円形で、１より10cm深い。礫は入っていない。

土坑３　住居址の南隅にあって、直径約１ｍの不整円形で、埋土内に角礫が21コ集積されていた（第三図版５）。

土坑４　住居址西壁中央部にあって、南北２ｍ、東西1.3ｍの不整長方形で、深さは１ｍのスリ鉢状の土坑である。埋め土は褐色土である。

土坑５　住居内中央に堀りこんであり、南北２ｍ、東西1.3ｍの不整長方形で、深さは一定でなく、最深部が床面から39cmある。内部には角礫が点在し、白瓷片、金くそなどが

出ている。住居址廃絶時か、近い時期にほりこまれたもので、埋め土はロームまじり褐色土であった。その上部を住居埋土がおおっていた。

溝（第２、４図第三図版）

Ｆ11で黒土の落ち込みを確認し、その後、Ｄ９、Ｃ７、Ｃ５でも検出された。丁度この場所が水田北側で埋め土の最も厚い部分であった。そのため、溝の全面調査はできなかった。部分的な断面調査で見ると、尻平沢の小扇状地の縁にあたり、南から北へと傾斜して、自然地形に東西に走る段差があったらしい。その段差の部分に、段差に平行して南に深く、北に浅いＶ字溝が２本走っている。その巾や造り方は平行や直線的でなく、不規則である。２本のうち南側（山より）を溝１（Ｍ１）、北側（川より）を溝（Ｍ２）とする。

溝１　南壁が高く長く、北壁は低く短かい。壁面はやわらかいが、溝底は少しかたくなっている。Ｃ６、Ｅ９では溝底に礫や遺物が散在し、投げすてられたようになっていた。溝底には砂利の推積はなく、溝に沿って水が流れたという痕跡はなかった。溝底の比高を見ると、調査地の東端を０とすると、Ｅ９で－３cm、Ｃ７で－１cm、Ｃ５で－６cm、Ｃ２で＋16cmとなっていて、中央部の方がかえって低い。

溝２　Ｃ３、Ｇ11では溝１と接しているが途中では間が離れているようである。溝底の比高は溝１の方が10cm低い。壁のほりこみは南壁が急となっている。溝底の比高は東を０とするとＣ５では－３cmと低く、溝１と同じ傾向を示す。

ＢＤ５列の壁断面（第４図④）で見ると、溝１はロームをおおう茶褐色土上面からロームまで堀りこんでいる。この溝を紫が強く、土目の細かい茶黒土が埋めている。北壁は低く、わずかに溝底より高くなっていて、溝２までの巾が広い。溝１から北へ３ｍいった部分がわずかに凹んでいて、初めそこを溝２と考えたが、それより北側の掘りこみの方を溝２と考えたい。この凹地をはさんで両側に焼土や木炭があって、何かの人為行動があったことを示す。溝１より4.5ｍ北に堀りこみがあり、これを溝２とする。この部分は黒土が埋めている。この黒土上面が溝と同じくおちこんでいて、その上面に礫が散在していた。その上部を小礫まじりの黒土がおおう。溝１、２ともに溝の北側に、北へのびるように砂利層があって、溝１のそれは溝２の埋め土の上に砂利まじりの砂土となってのっている。このあり方から溝２の方が溝１より古いことと、水の流れは南側の高台から北の低地へと流れていたことを示す。このことから、溝１、２ともに、水を流すための施設でなくて、上段の集落地と、下段の集落外を区別するための区画としての施設と考えたい。

4. 遺　　物

今回の調査では、遺物量は少ない。Ｈ２号住居址と溝１・２からは比較的多く出土し、そのほとんどが平安時代のものである。

山よりの１・２次調査では縄文時代の前期と中期前半の遺物のみが大量に出土したが、今回の調査では縄文時代の遺物は少ない。特に土器の出土は少かった。少ない土器片を見ると、中期後半の加曽利Ｅ式土器（第５図１・２）と晩期氷式土器の深鉢（同図３）がみられ、当遺跡の居住期間を広げた。石器は打石斧のみで39コ（完形28、上半部５、下半部４）出土している。

平安時代の遺物は、白瓷を主体とする土器や土製品、石製品、鉄器、炭化種子などがある。その遺物量は少なく、完形品は少ない。

Ｈ２号住居址には比較的遺物は多かったがその出土量は少ない。その多くは床面でなく埋土内である。白瓷（坏、丸皿、輪花皿、壺）59片、土師器（甕、つば釜)18片、鉄器（刀子、ノミ）３、鉄滓、羽口片、かなとこ石、炭化種子などがあって、白瓷では器形がわかるのが皿１個体分のみである。

溝１からは白瓷（坏、皿、壺)、須恵器（坏、水甕)、鉄片、石製品が出土している。

溝２からは白瓷（坏、皿)、須恵器（坏)、土師器（甕)、石製品が出土している。

土器（白瓷、土師器）

壺（第５図４）Ｈ２号住居址から出土した口縁の小破片である。外反してきた口辺部が口縁でおれるように立ちあがり、巾のせまい口縁帯部をつくっている。口縁帯部の断面形は丸味をおび、稜もない。時期的に新しいか。胎土はち密で灰白色である。灰釉は両面につけられ、全体にこげ茶色で淡緑色の斑点をもっている。

浅鉢（同図５）溝２から出土したもので、図上復元した。深皿といった方がよいのかも知れない。底部から腰を張って立ちあがってきたのが、口縁で短かく外におれるように外反している。底部には糸切痕が残る。高台端と内面底部には使用ずれが見られる。胎土はち密で灰白色である。灰釉は両面につけられ白色で光沢をもっている。

皿（同図６）Ｈ２号住居址の北壁よりの焼土附近の床面から出土したもので、口縁部を２ヵ所欠いている。底部から大きく外に開いて外反しているため、口縁がわずかにさがっ

ている。内面にヘラでけずった段がある段皿である。底部はヘラけずりされている。内面底部と高台端に重ね焼きの痕跡が残る。使用ずれは見られない。胎土はち密で灰白色である。灰釉は両面につき、白ぽく透明である。

輪花皿　小破片のいくつかに輪花が見られる。その多くは、口端を指頭で外から内へおしている。1例だけヘラで縦に深くなでておしているのもある。内側から外へ指でおしているのも一例ある。

甕A（同図7）H2号住居址出土の小破片である。ロクロ成形で、指で水引きした浅い溝状の凹みが器面につき、全面に浅く細かい条線が横走する。内面も口縁には表面と同じ条線がつき、胴部はやや巾広で浅い条線がつく。器形は口縁が短かく外反しており、胴部はあまり張らなく、口径より胴径が小さい。器高は20cm未満である。胎土には細石粉を含み、焼成はよい。内面は黒色に変色し、外面の頸部一部にススが附着する。

甕B（同図8）溝2出土の小破片である。ロクロ成形で、器面の口縁部には、浅く細かい条線が横走している。胴部は巾2㎜の櫛状器具による平行条線が横走している。内側はAと同じ条線が横走している。器形は口縁が肥厚くなり、Aにくらべると外反度が少ない。胴は球形にはっている。Aにくらべると器形は大きくない。胎土はち密で、焼成はよい。器厚はAにくらべると簿い。内側の口縁上部と外面胴上部にわずかにススが附着している。

甕C　溝2出土の小破片である。輪積み成形で、胴部には縦の浅い平行条線がつく。器形はわからないが、他遺跡出土例では、口縁が短かく外反し、胴はほとんどはらない長胴形である。胎土に微石粉を含み、焼成はA、Bに較べるとよくない。器厚も厚く7～8㎜ある。

つば釜（同図9）H2号住居址出土の小破片である。胴形はわからないが、器厚1cmと厚く、つば巾は2cmである。胎土に小石粉を含み、焼成はよい。

鉄器・鉄滓・羽口

刀子　10（第四図版1）はほぼ完形の刀子であるが、丁度半分におれて、それを重ねておいた状態でH2号住居址の埋土中から出土した。刃部長さ9cm、最大巾2cmの巾広の刀子で、切先は丸味をおび、先端が上部へあがっている。中子は一段と巾が狭くなり、末端へと細くなっている。断面形は長方形である。11（同図版2）はH2号住居址床面から出土し、刃部が欠失している。残存部で刃部巾1cmと巾がせまい。中子でも5.5cmと短かい。

ノミ　Ｈ２号住居址埋土中に出土したもので完形品である（12、同図版３）。長さ 9.6 cm、刃部巾 2.2cm 、刃部から６cmのところで袋状にまいて着柄部をつくっている。その上部での径 2.3 cm、内径 1.5 cmある。

羽口は火床西側の床面に点在して３片出土した。羽口尖端部の破片である。小片であるため大きさを計測できない。

鉄滓は土拡５の埋土の中と火床の中から出土しており、いずれも鉄分の含有は少なく、溶解物の固まった金くそとした方がよいと思う。土坑５から２点、火床から10点ある。いずれも小さいものである。

石　製　品

かなとこ石、石槌、砥石の三種ある。

かなとこ石　４点出土している。第６図１（第４図版４）は火床の東横におかれていたもので、16×31×13cmのほぼ長方形の砂岩の割石である。底面は平らかでなく、そのままおいたのでは不安定である。上面は全面が火熱にあって赤く変色している（ドットの部分)。部分的に磨いて平らかにしており、その中央部に鍛造痕が残り、少量の鉄分が附着している（×の部分)。側縁の一面の中央には数条の細い条線が見られ、刀子の刃部か針などをこすったものと思われる。この部分に鉄さびがついている（同版４の下)。２（同図版５）は火床西側の床面から出土した。長楕円形の自然礫を利用しており、残存部の大きさは11×26×12cmであり、礫岩と思われる。上面が火熱にあって焼けており、打痕が見られる。鉄分は附着していない。３(同図版６）は最も見事なかなとこ石である。Ｃ６溝１から出土した。平面形三角形の砂岩自然礫で、使用中に割れた半欠である。残存部の大きさは12×21×12cmである。上面、下面とも赤く変色し、両面が使われている。上面は鍛造痕も強く残り、鉄が附着して黒光りしている（同図版６の下)。下面にも鉄の附着が見られるが、砥石として再利用されている。側縁も砥石として使われている。４（同図版７）はＥ９溝１から出土した。硬砂岩の長円礫で、上面はそれ程平らかでない。火熱で赤く変色し、打裂剝離も見られる。鉄分は上面でなく、わずかにおりた側縁上部に附着している。その鉄の附着したところと下面が磨かれている。14×33×９.5 cmの大きさである。

石槌　４点出土している。いずれも棒状の河原石を利用しており、使用痕が側縁に残る横槌と、先端に残る縦槌とがある。５（第五図１）は完形品である。Ｈ２号住居址に接する壁外から出土した。長さ17.5cm、巾5.8cm、厚さ4.8cm、重さ 800 g の大きさの砂岩であ

る。断面形長方形の短辺となっている１側面の両端に使用痕が残る。その面は丸味をもって、全体に外側へ傾斜しており、ややななめにして打ったことを示している。両端にもわずかに打痕が見られる。また１側面も磨かれている。６（同図版２）は上面が自然剝離した方柱状の砂岩で、柄部が欠失している。残部の大きさは長さ13cm、巾４cm、厚さ4.3cm、重さ500ｇである。槌部がわずかにふくらみ、石の形をえらんだようである。その部分全面に使用痕が強く、丸味をもち、磨かれたようになめらかである。７（同図版３）はＤ５溝２から出土したカツオぶし形の砂岩礫である。長さ19cm、巾6.6cm、厚さ4.3cm、重さ750ｇの大きさである。両端を激しく使用しており、平らとなっていて側縁に剝離も見られる。さらに火熱にあって赤く変色している。打面には少量の鉄分がつき黒くなってている。４コの石槌の中で、小鍛冶に使ったことが一番確かなものである。両側縁にも使用痕が見られ、一側縁は磨面が残り、長さ12.5cm、最大巾２cm。もう一縁は打痕が、長さ５cm、最大巾１cmに見られる。また一側面の中央部に打裂痕が４×2.5cmの大きさの凹みとなって残っている。８（同図版４）は断面三角形の砂岩礫の半欠である。長さ9.2cm、巾4.5cm、厚さ5.2cm、重さ340ｇの大きさである。先端が打面として使われている。三稜のうち２つの稜にも使用痕があり、ひとつは打面で長さ7.5cm、巾1.3cmあり、もうひとつは長さ８cm、巾１cmに磨面が見られ、両者とも平らかである。前２者が横槌で、後２者が縦槌である。この縦槌は縄文時代早期の特殊磨石とそっくりである。

砥石　９（同図版５）はＨ２号住居址の北壁中央によりかけるように、台形状の上底を下にしておかれていた。平面形が台形、断面形が三角形の砂岩礫である。大きさは上底23cm、下底51cm、巾24cm、最大厚15cmである。上底面は巾３cm、長さ23cmに平らかに磨かれている。下底面は巾11.5cm、長さ35cmに、それに接する面も巾４cm、長さ30cmに磨かれ、稜がきちっとしている。この石を砥石として利用する時、上底面、下底面を平らにすえるのに苦労すると思う。壁によりかけてあったのはそのためかと思う。他にかなとこ石１・３も砥石として使われており、土坑１の集石の中にもわずかな部分に磨面のある砥石がある。

炭　化　物

火床の中から桃の炭化物片（第五図版６）が１コ出土している。土坑１の焼土の中にカヤの炭化したものがあった。

ま　と　め

今回の調査では少量の遺物と、住居址１、溝２、土坑５という検出であった。

今までの調査と関連して見ると、上の原遺跡扇状地部の遺構の分布状況がおおよそ推察できる。尻平沢にそって、扇頂部に縄文時代前・中期の集落があり、扇央か扇端、そして台地にかけて平安時代の集落が分布す。その下限（北限）を画するものとしてＶ字溝がほられていたと思われる。また山よりにかけては土坑群があった。今回の土坑は第三次調査の土坑とつらなるものと考えられる。

平安時代集落内のＶ字溝については、お玉の森遺跡校庭用地内調査で確認している。その全体をつかむことはできなかったが、扇状地の傾斜方向に走るものと、それに直交するものとがあり、その溝をはさんで住居址があり、住居群を区画するものとしての役割をもっているようである。

遺構と遺物では小鍛冶遺構とそれに関係する石製品が注目される。今まで、下伊那、木曽で平安時代の遺跡を調査し、鉄滓、羽口を検出、鍛冶の可能性を知っていたが、自分の手で鍛冶遺構を調査したのは今回が初めてである。昭和39年のお玉の森遺跡１号住居址で鍛冶遺構があったが、その調査の日、学級遠足があって立ちあえなく、次の日は調査しすぎていて、完全な姿を知ることができなかった。今になってもこの住居址については後悔が残っている。今度、上の原遺跡で調査して火床、かなとこ石を確認したが、調査が終っての９月に、中野市の金井汲次先生から「古代末の安源寺の鍛冶屋」（高井43号）の抜刷をいただき、立派な小鍛冶遺構を調査しているのを知った。これを事前に読んでいたらもっと目をくばった調査ができたのではないか、何か調査に手落ちがあったのではと不安が残っている。

お玉の森遺跡１号住居址（長野県木曽郡お玉の森遺跡1977、３）では、住居址南東壁のほぼ中央部、床面に巾45×70cmの長方形で、深さ５cmにほりくぼめ、壁は煙道状にほりくぼめて、上部では18cmほりこんでいた。火床、煙道のもによく焼けていた。火床はかたい状態ではなく、そこから鉄滓と羽口が出土している。これに南接する浅いピットの中からは鉄滓が集中して出土して、鉄滓計22あった。上の原遺跡のとくらべると、火床の状態や鉄滓が違っており、小鍛治というより、製鉄遺構のように思うが、断定できる知見をもっていない。同遺跡では、２・３・11・13号住居址から鉄滓が、13号住居址から羽口が、8・

12号住居址から石槌が出土している。これらを見ると、鉄製品製作が相当普遍的になっていたことを思わせる。お玉の森遺跡では鎌、紡錘車、矢、刀子、釣針、針が、当遺跡では刀子、ノミが出土し、いずれも小形な鉄製品である。このような日常用品のうち小形のものをつくっていたのだろう。

今日的な概念で、かなとこや槌を鉄製品として考えていて、お玉の森遺跡ではかなとこ石については全然注意をはらはなかった。石槌については、縄文時代早期の特殊磨石の再利用で、トチの実など穀をとる槌とも考えた。今回、横槌と縦槌とがあって、区別して使っていたことがわかった。このうち横槌は木の実の穀割りに使われてもよいと思う。木曽地方には栃の大木が現在もあり、正月には栃餅を多くの家で食している。

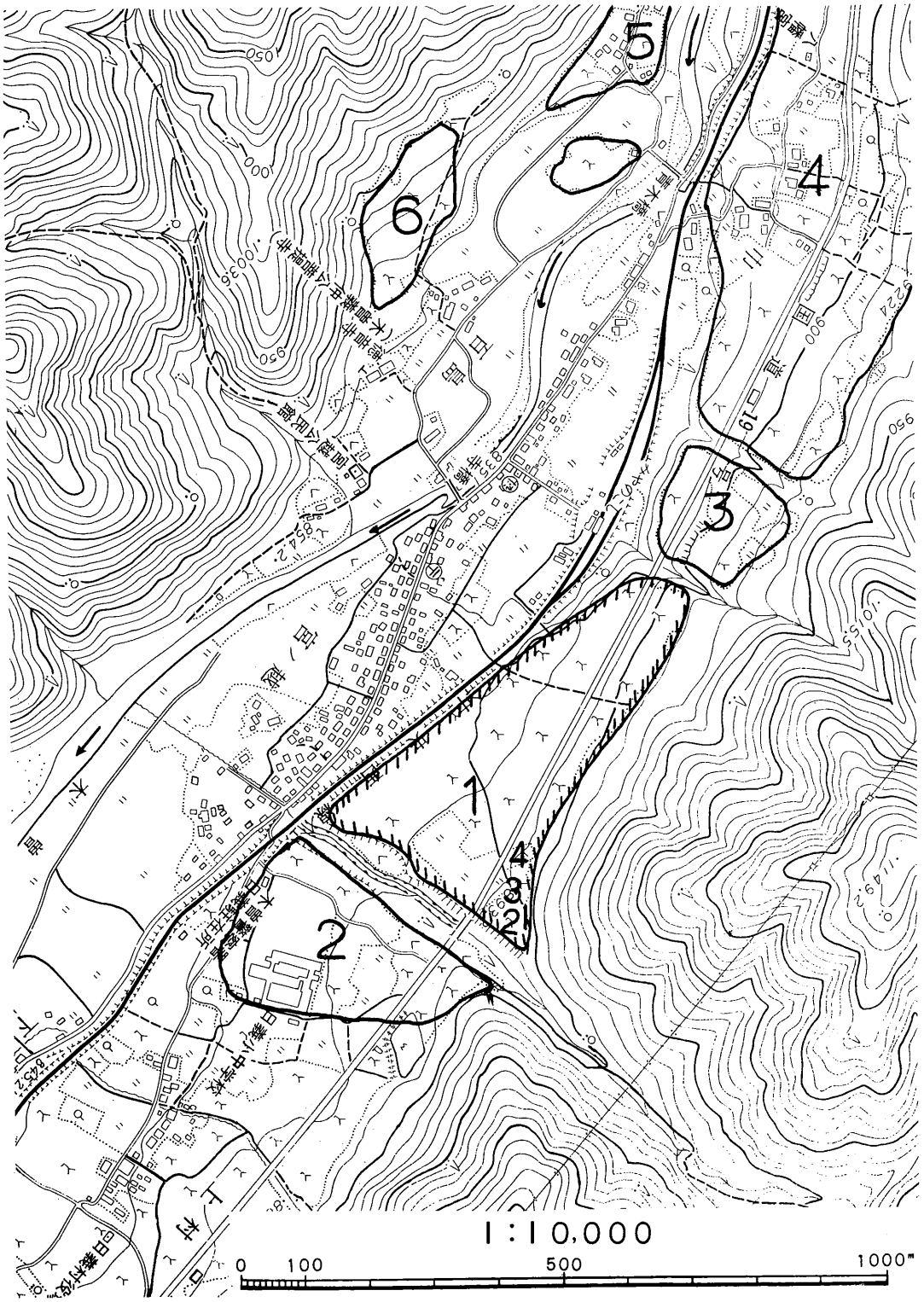
白瓷、土師器ともに出土量が少なく小破片であるため、時期を決定するものはない。木曽地方への白瓷のあり方や、お玉の森遺跡の例から見て、平安時代後期、11Cと考える。

安源寺遺跡の小鍛冶遺構と比較すると、共通点は、①住居址は長方形で、大きさがほぼ同じである。②火床は住居内中央部にある。③その部分が一段と低くなっていて、作業場がはっきりしている。④羽口、かなとこ石、鉄滓、鉄器が出土している。相違点は、①火床がカマドに接してある。②羽口が完形品で3個出土している。③焼き入れのための水鉢がある。④火床やそのまわりに鉄の飛沫が見られる。⑤出土土器が完形品で、数量も多い。

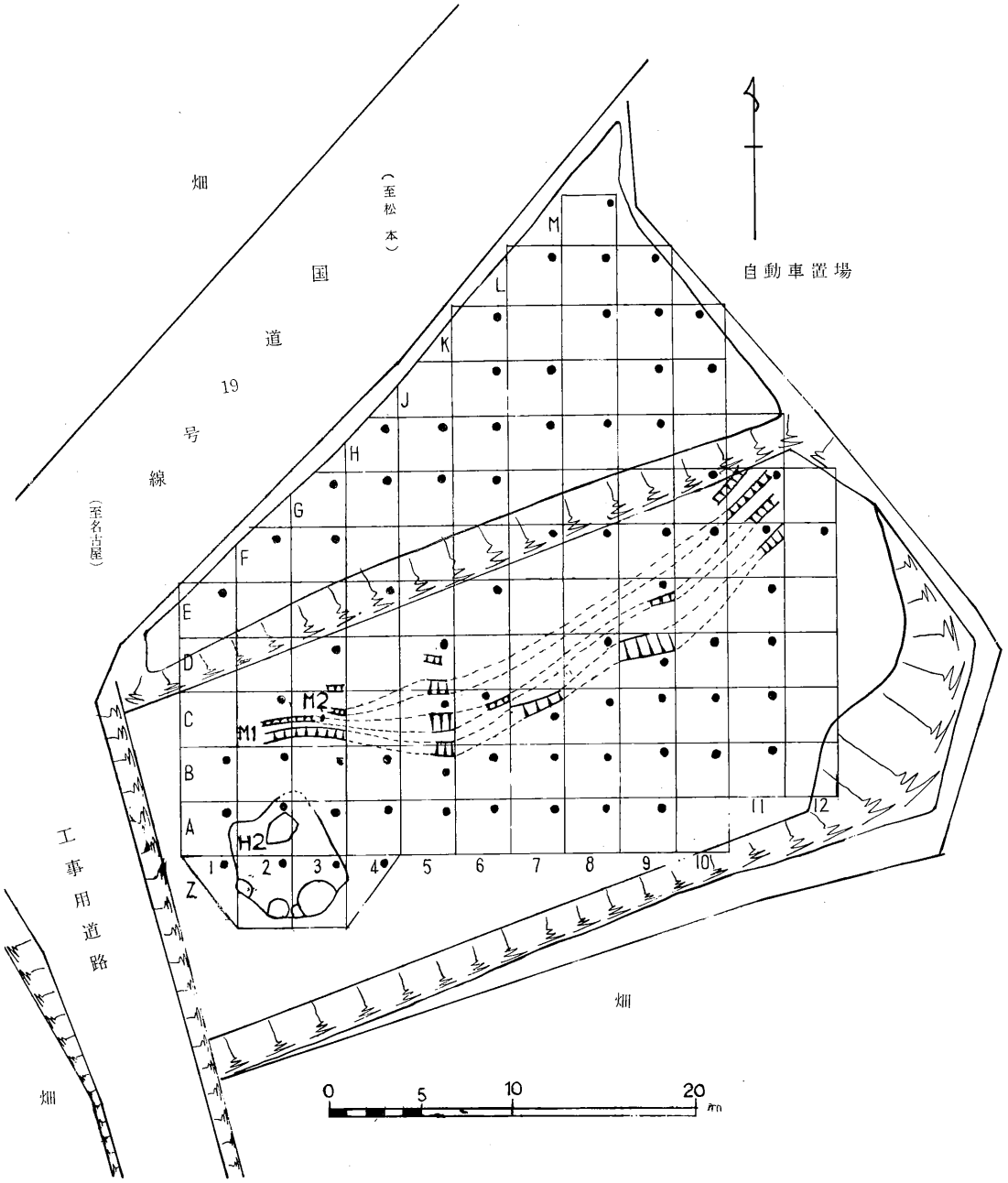
住居の構造や、火床、かなとこ石など共通であり、当時の小鍛冶は住居内で簡単に行なわれていたものと思う。

今後、もっと類例や地域における資料をつかんで、小鍛冶の様子や鉄原料の問題などを追求したい。

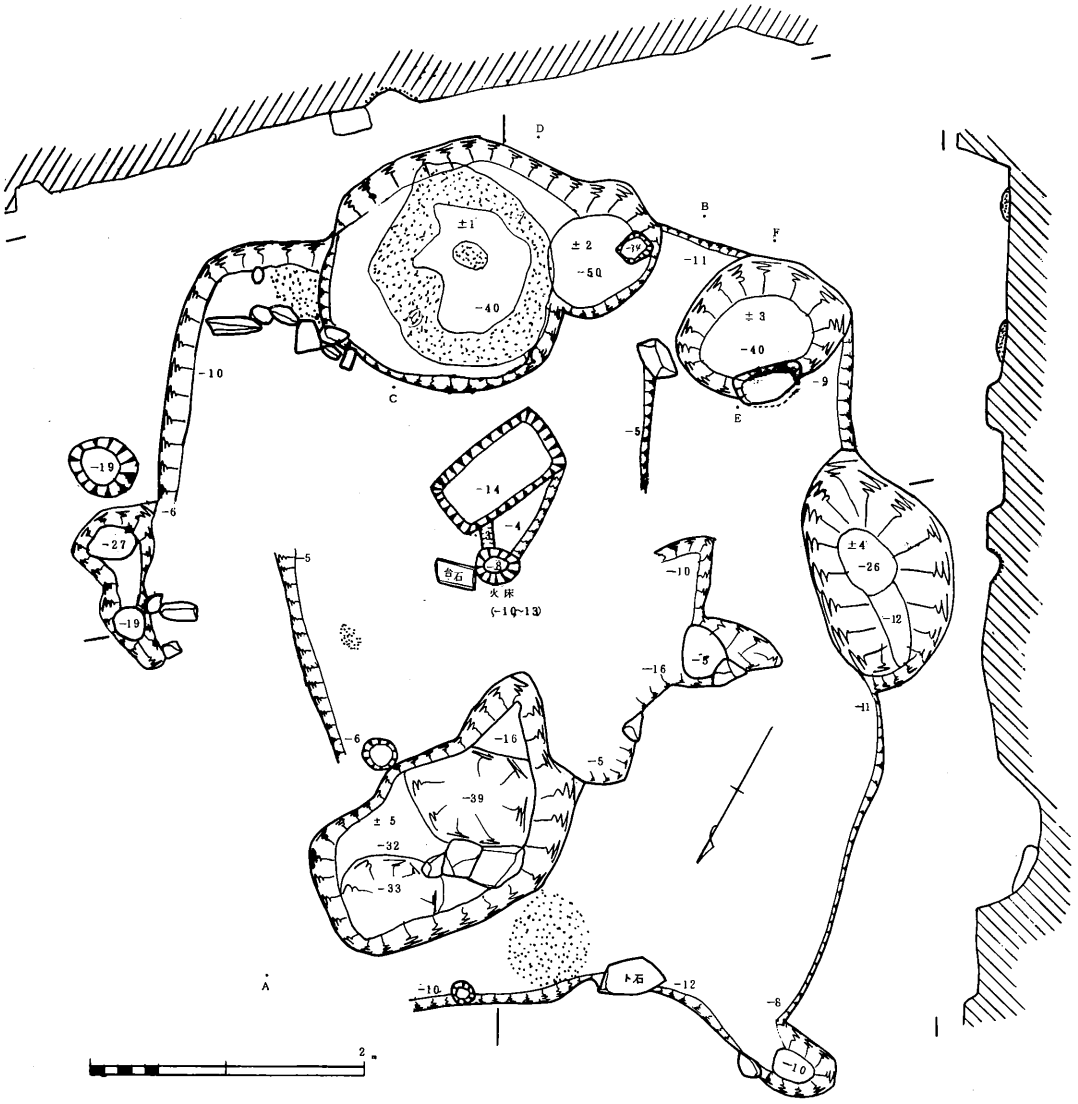
（文責　神村透）



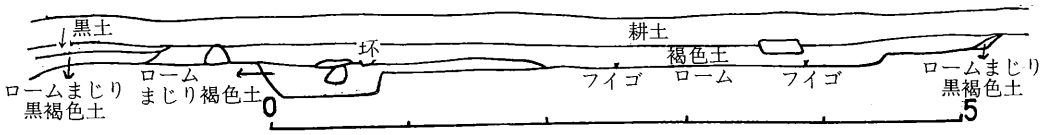
第１図　遺跡附近地形図



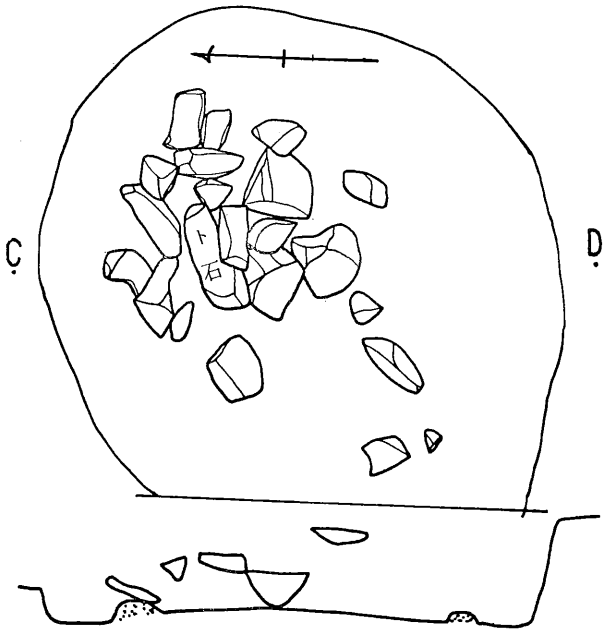
第2図　調査地附近地形図　（1：400）　・調査グリット



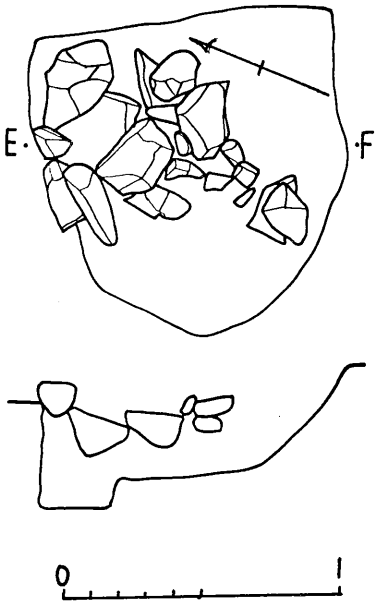
第３図　Ｈ２号住居址実測図



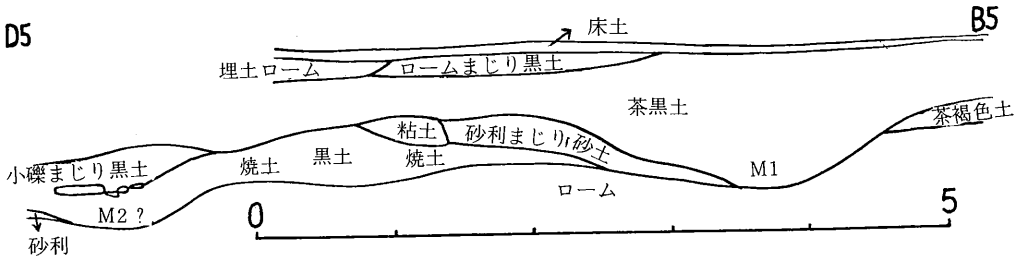
① H２号住居址地層図



② 土拡１実測図

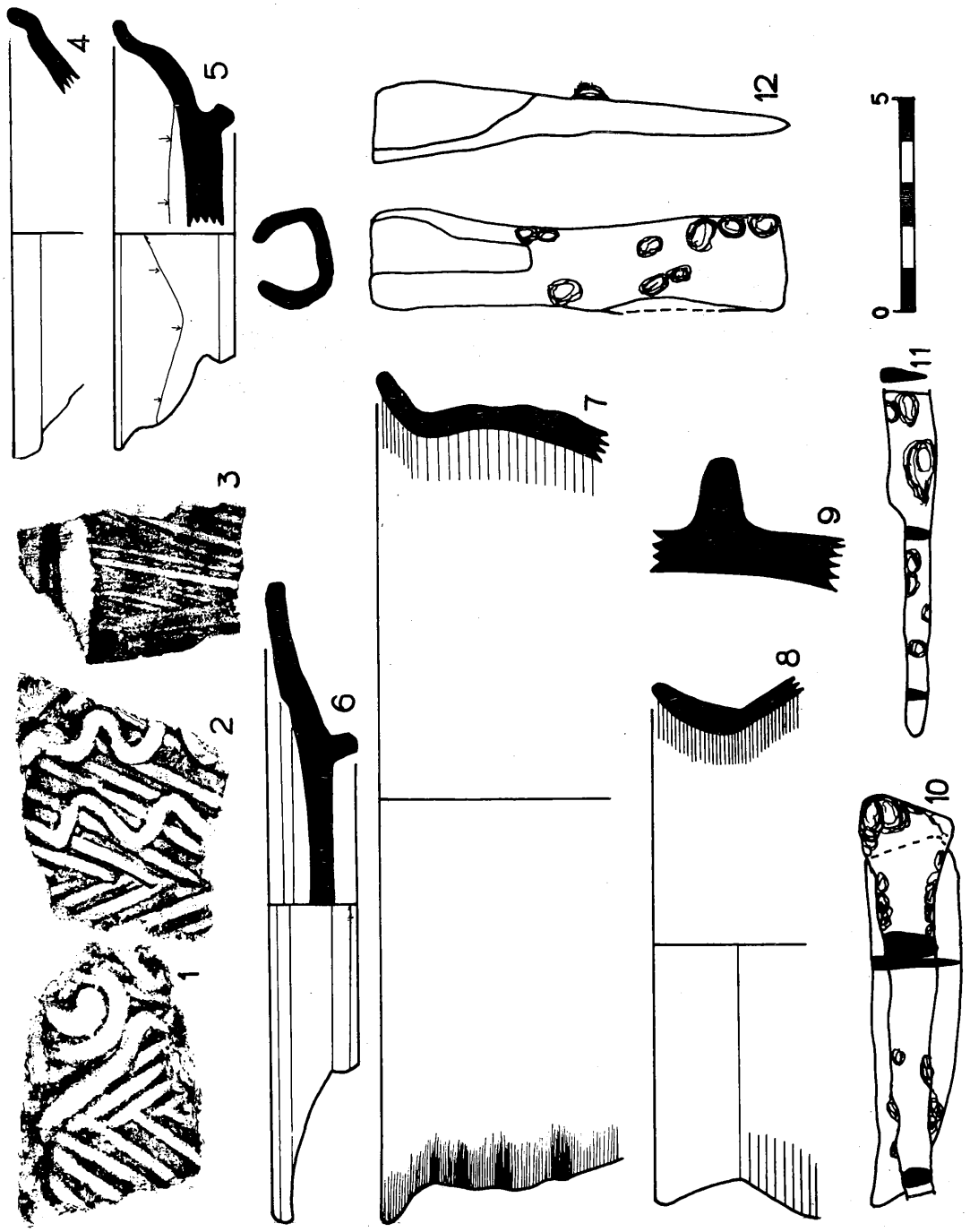


③ 土拡３実測図

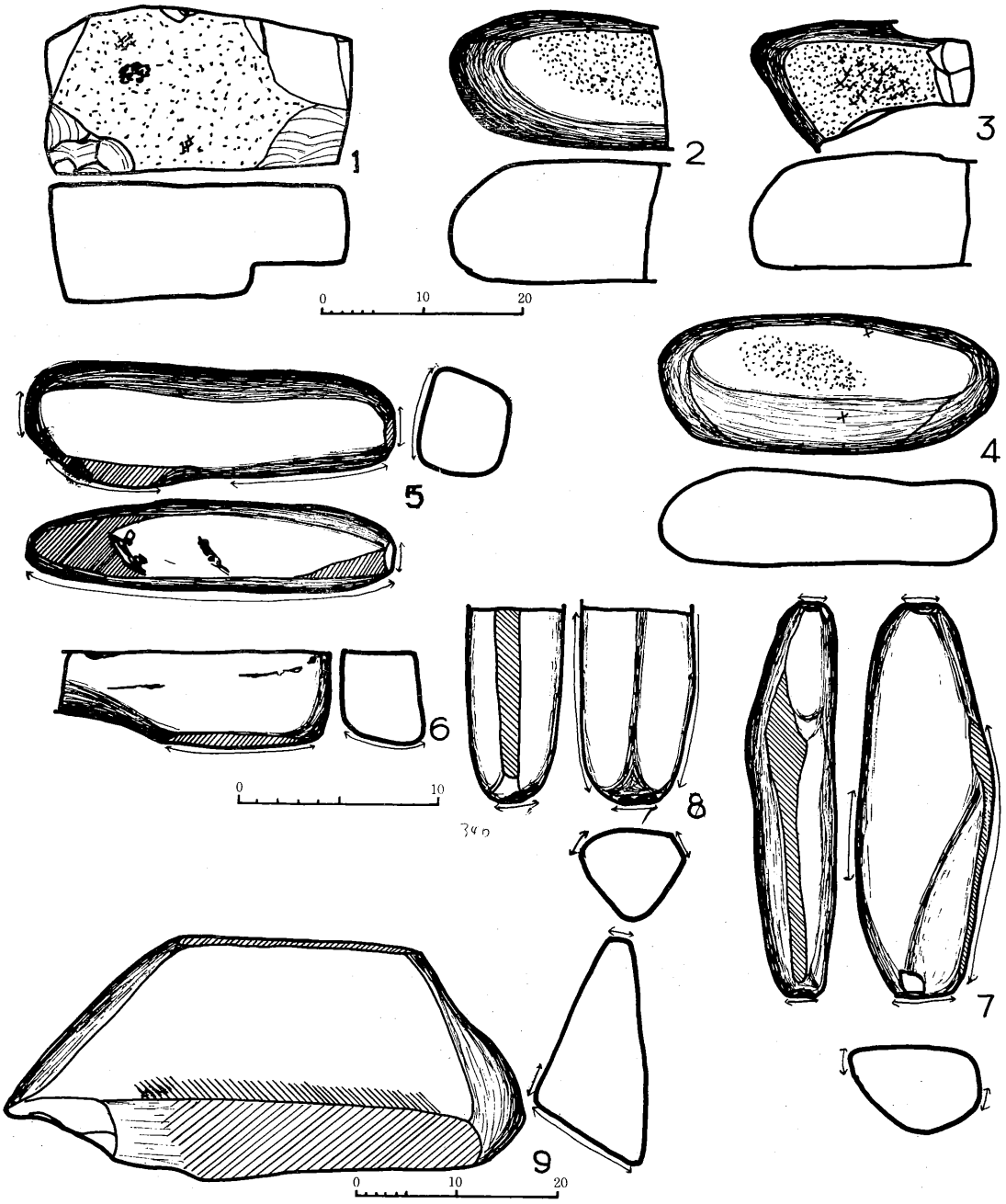


④ 溝１，２地層図

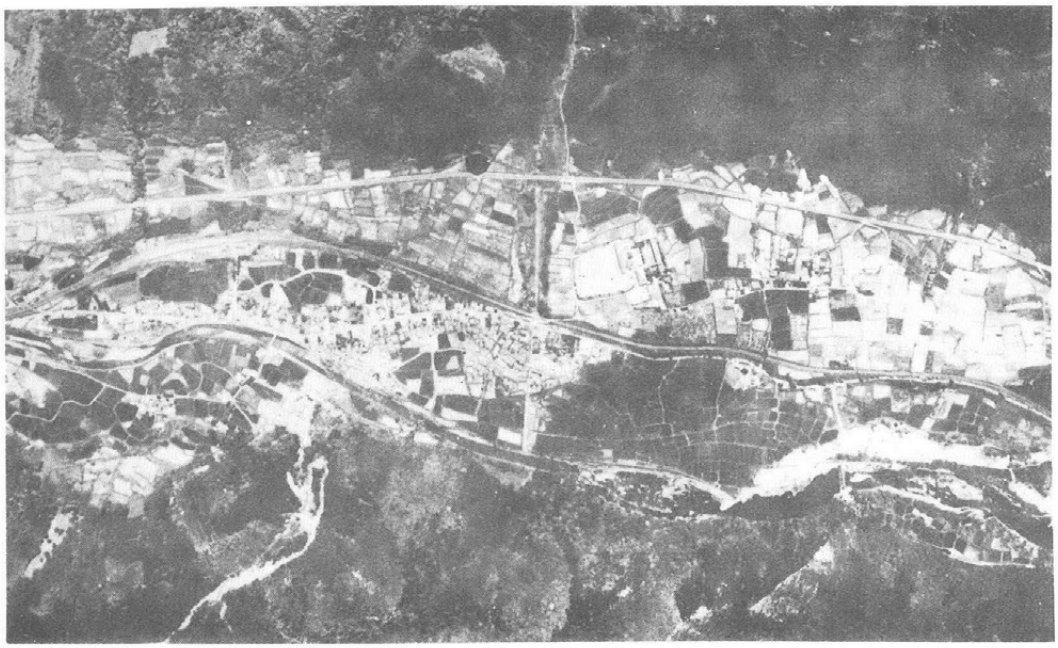
第４図　地層図と土坑実測図



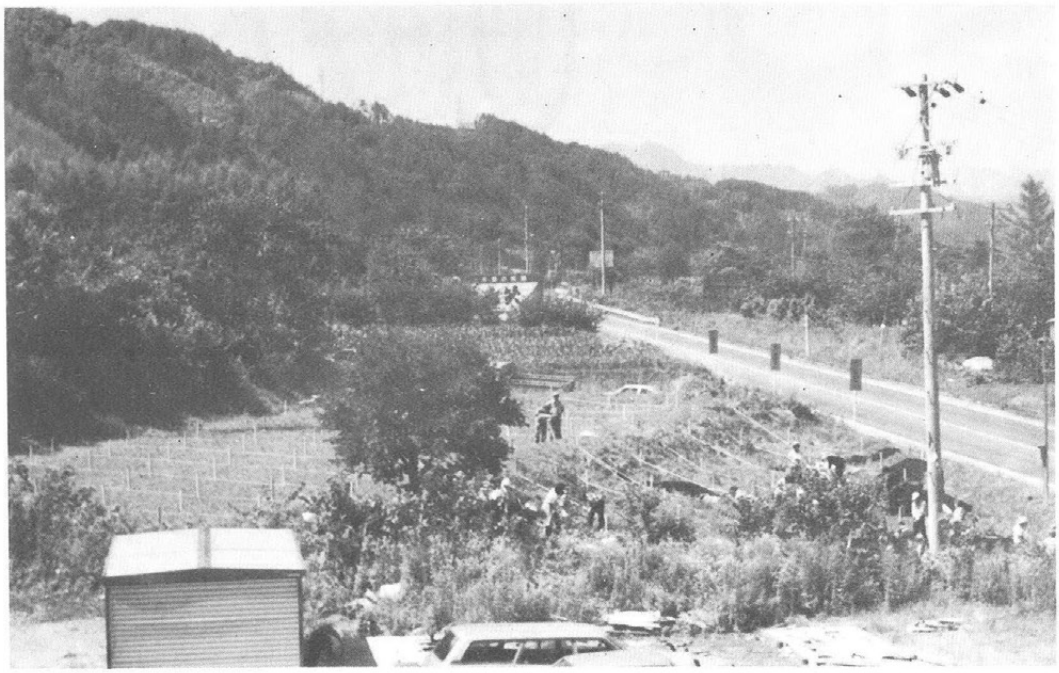
第５図　出土土器と鉄器実測図



第6図　出土石製品実測図



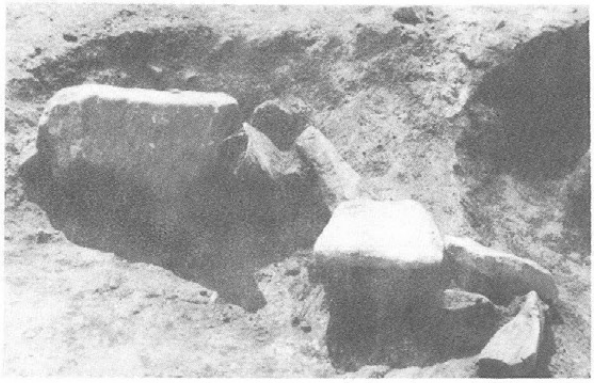
1．宮越部落



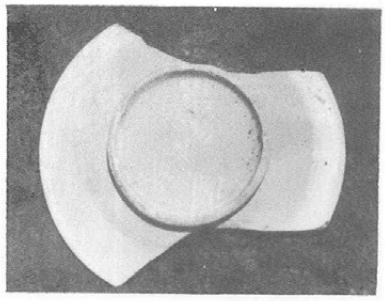
2．調査地（北東より）

第1図版　遺　　跡

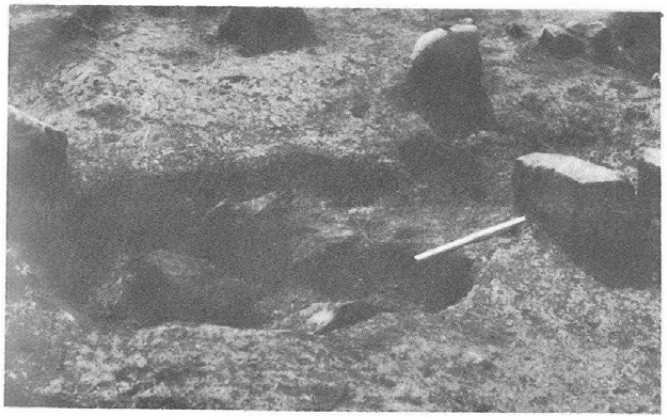
1．Ｈ２号住居址（南東より）



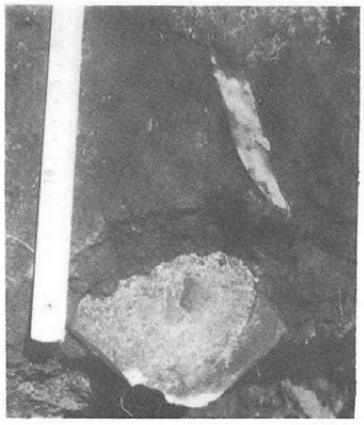
2．カマド



4．皿出土状態

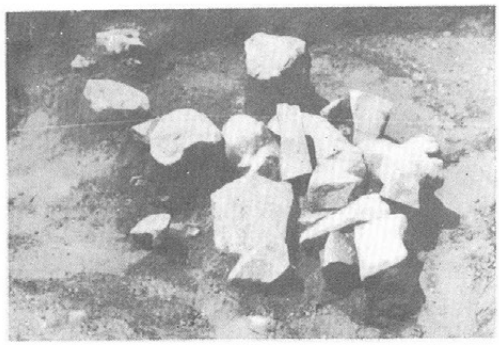


3　小鍛冶

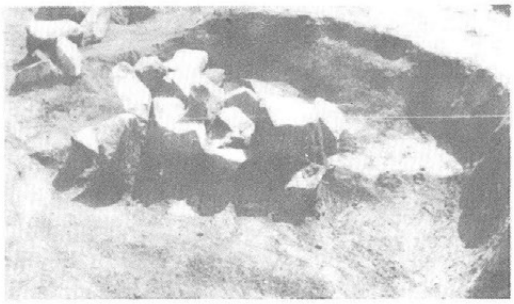


5．刀子と坏の出土状態

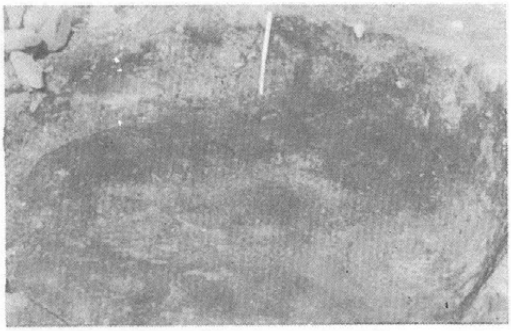
第２図版　Ｈ２号住居址



1．土坑1（配石）

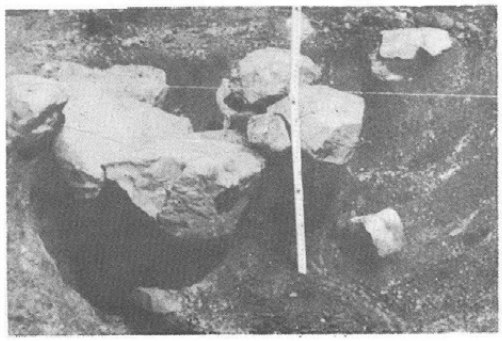


2．土坑1（配石断面）

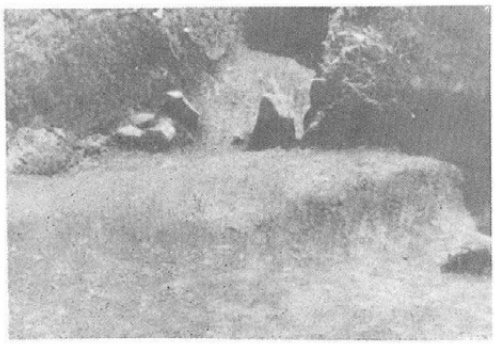


3．土坑1（焼土）

4．土坑1（禾本科植物炭）



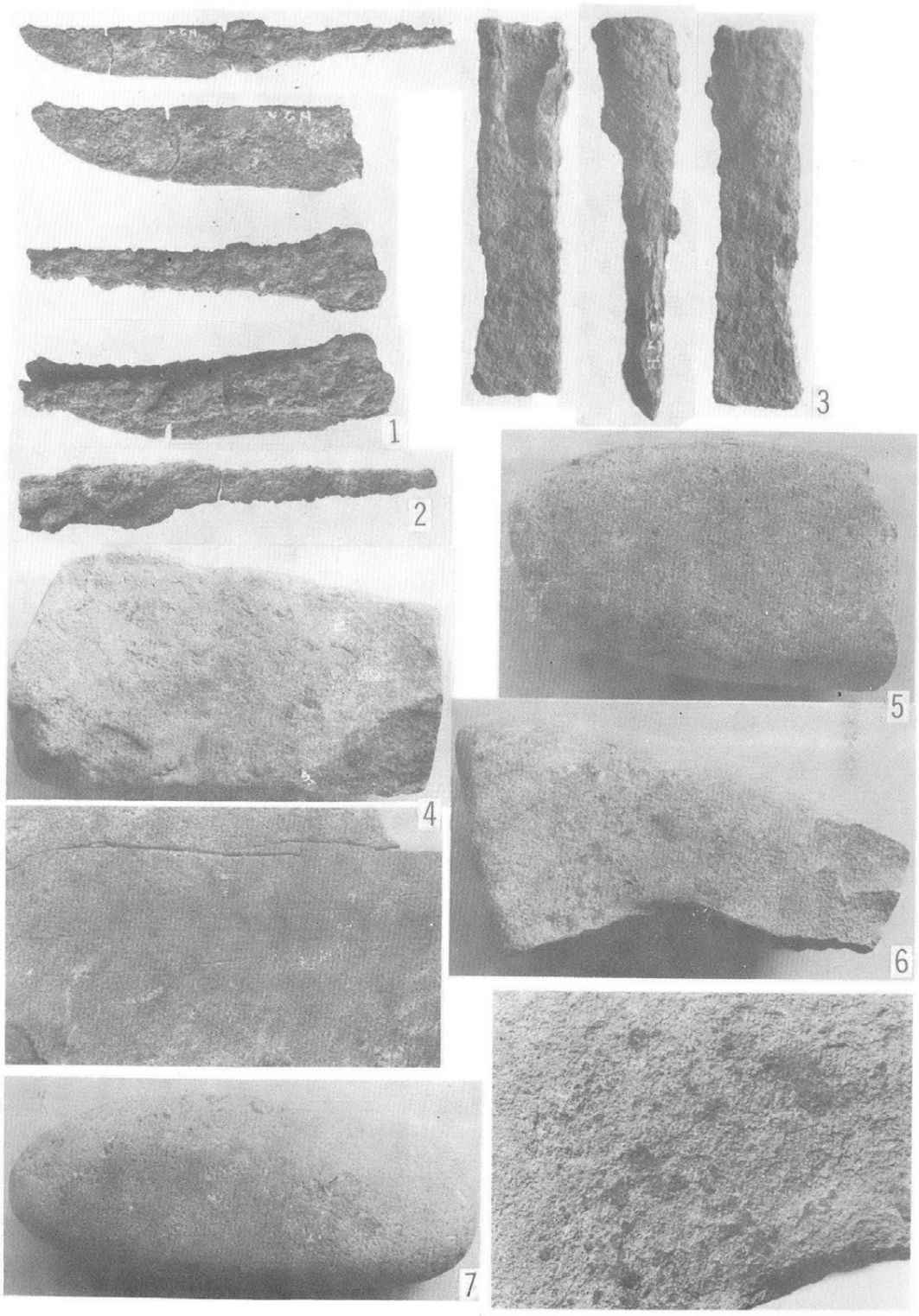
5．土坑3（配石断面）



6．溝1と2

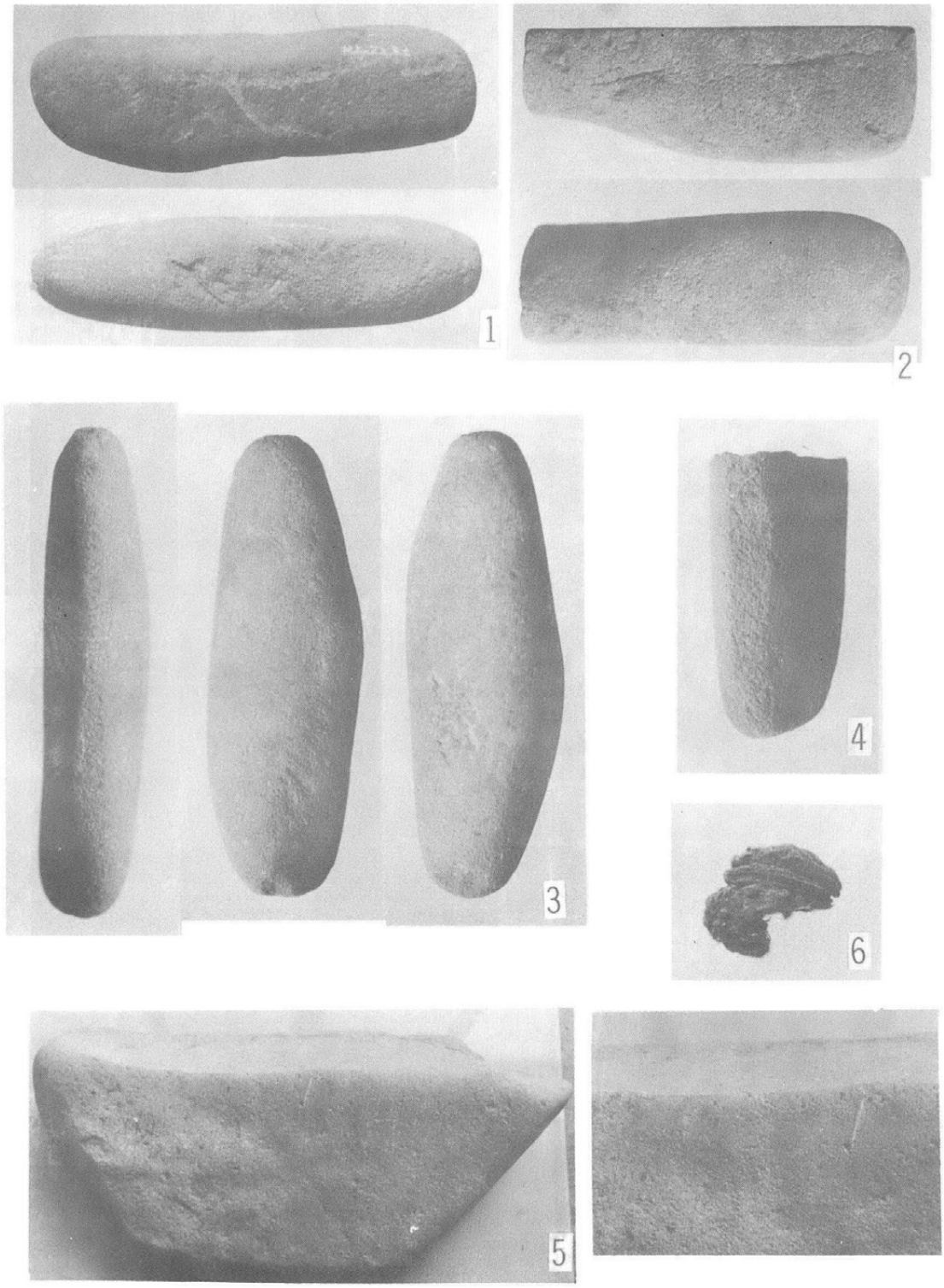
7．溝1

第3図版　土 坑 と 溝



1．2刀子　3．ノミ　4～7カナトコ石

第4図版　鉄器と石製品

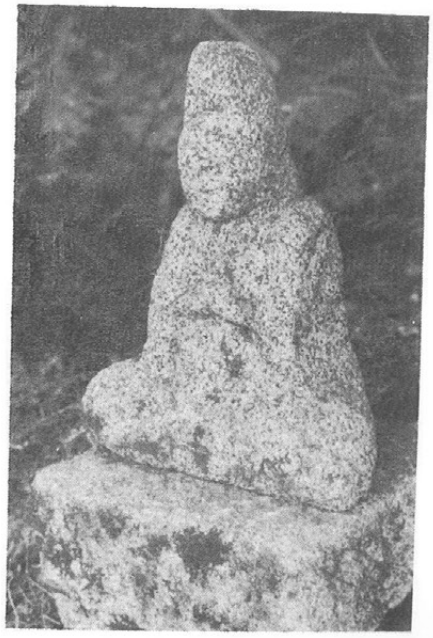


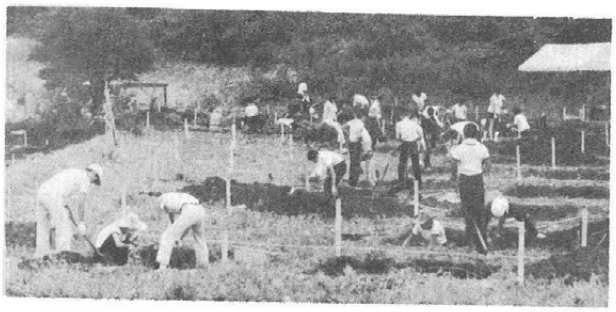
1～4．石槌　5．砥石　6．炭化種子

第5図版　石製品と炭火種子

調査関係者

土坑の実測





グリットほり

馬頭観音像

第6図版　調査スナップ

非売品

発　行　昭和54年３月15日

編　集　長野県木曽郡日義村
　　日義村教育委員会

印　刷　㈲安藤印刷☎(02642)2-2353